

機会不平等

「ゆとり教育」と「階層化社会」

派遣〇しはなぜセクハラを我慢するか

労組はあなたを守ってくれない

「市場化」される子供たち

不平等を正当化する人びと

優生学は復権した

斎藤貴男

Takao Saito

機會不平等

斎藤貴男

文藝春秋

斎藤貴男（さいとう・たかお）

1958年生まれ。ジャーナリスト。『カルト資本主義』（文藝春秋、97年）でバブル崩壊以降、オカルティズムに急傾斜する日本の企業社会を描き、『プライバシー・クライシス』（文春新書、99年）では、国民総背番号制による人間管理・監視にいち早く警鐘を鳴らした。今回の『機会不平等』は真に自由な個人とは何かを問いつづけてきた著者の総決算的な作品となっている。他の著書に『精神の瓦礫 ニッポン・バブルの爪痕』（岩波書店、99年）など。

きかいふびょうどう
機会不平等

2000年11月30日 第1刷

2001年1月1日 第2刷

著 者 さいとうたかお
斎藤貴男

発 行 者 平尾隆弘

発 行 所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23（〒102-8008）

電話（03）3265-1211

本文印刷 理想社

付物印刷 大日本印刷

製 本 所 矢嶋製本

・定価はカバーに表示してあります
・万一、落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取替えいたします。小社営業部宛お送り下さい

©Takao Saito 2000

Printed in Japan

ISBN4-16-356790-9

機會不平等〈目次〉

第一章 「ゆとり教育」と「階層化社会」…………… 11

「非才、無才には、せめて実直な精神だけ養ってもらえばよい」。基礎学力を培う義務教育の年間授業時間をあえて削減する「ゆとり教育」について、三浦朱門・前教課審会長はこう説明した。九〇年代の日本型経営の崩壊とともににわかに加速した「複線型教育」への回帰――。

第二章 派遣OLはなぜセクハラを我慢するか…………… 73

住友不動産の「夜のセクハラ大運動会」で餌食になったのは、派遣OLたちだった。九五年に出された日経連の政策提言で「雇用柔軟型グループ」に仕分けされた彼女たちは、果たして「自由」を得たのか。容姿までもがランク付けされて切り売りされるその「市場」の実態――。

第三章 労組はあなたを守ってくれない……………105

市場化する雇用環境を積極的に受け入れよう——。年俸制、リストラが進む電機・情報関連産業の労組「電機連合」の急進派委員長は「被害者の運動から創造的運動」への脱皮を唱えた。だが、その彼が、東芝の労使による非公式組織「扇会」の出身であったのが私には気になった

第四章 市場化される老人と子供……………147

わずか八畳の民間アパートの一室に三十一人の子供がすし詰め。神奈川県の子供たちは雨の日が嫌いだ。雇用調整の結果、急増した「共働きでなければ生きていけない世帯」。だが、女性が安心して働くための社会的インフラは、財政改革の名のもと逆に、切り捨てられていく

第五章 不平等を正当化する人々……………197

「全てを市場に委ねよ」声高にこう主張しながら、九〇年代の日本の政策転換を図った一群の「改革」経済学者たち。彼らの思想はどのようにして形成されてきたのだろうか。「規制緩和」政策の理論的支柱となった中谷巖氏には塩路天皇支配下「日産」での強烈な体験があった

終章 優生学の復権と機会不平等……………235

日本の生命保険業界団体の内部向け報告書に「(今後) 遺伝子情報に基づく査定を求めていくべきだ」との記述がある。「機会不平等」を是とする優生学的思想はなぜ、復権しつつあるのか。「社会ダーウィニズム」の視点から、日本の全ての「改革」の文脈を捉えなおすと――。

装丁 鳥巢三津子

機會不平等

まえがき

教育論議が花盛りである。教育改革を進める人々。それでは学力が低下してしまうと恐れる人々。教育勅語は悪くないと言い出した人々。軍国主義の復活を許すまじと、これに対抗する人々。

そうした様子を見ていて常に感じるのは、誰もが自分自身の生い立ちや勉強、学習、体験に照らして物を言っているということだ。当たり前の話、見当もつかない世界については何も言えないに決まっている。

たとえば深海魚が何を考えているのかなどということは、人間には多分、永久に理解できない。もちろん深海魚は極端すぎる例であり、人間同士である場合は、かなりの程度、お互いの立場に想像力をめぐらせ、尊重できるから、議論が成立する。特に教育問題は、現代人の全員が何らかの教育を受けた体験者で、自分自身にも子供や孫がいる人が多いので、余計に熱を帯びていく。

そう考えて、気がついた。大昔、教育が万人のものでなかった封建時代には、議論など成り立たなかったに違いない。人間対深海魚の関係とは言わないが、同じ人間同士でも、基礎的な知識

の差が大きすぎれば、片方はもう片方の言いなりになるしかなくなってしまう。

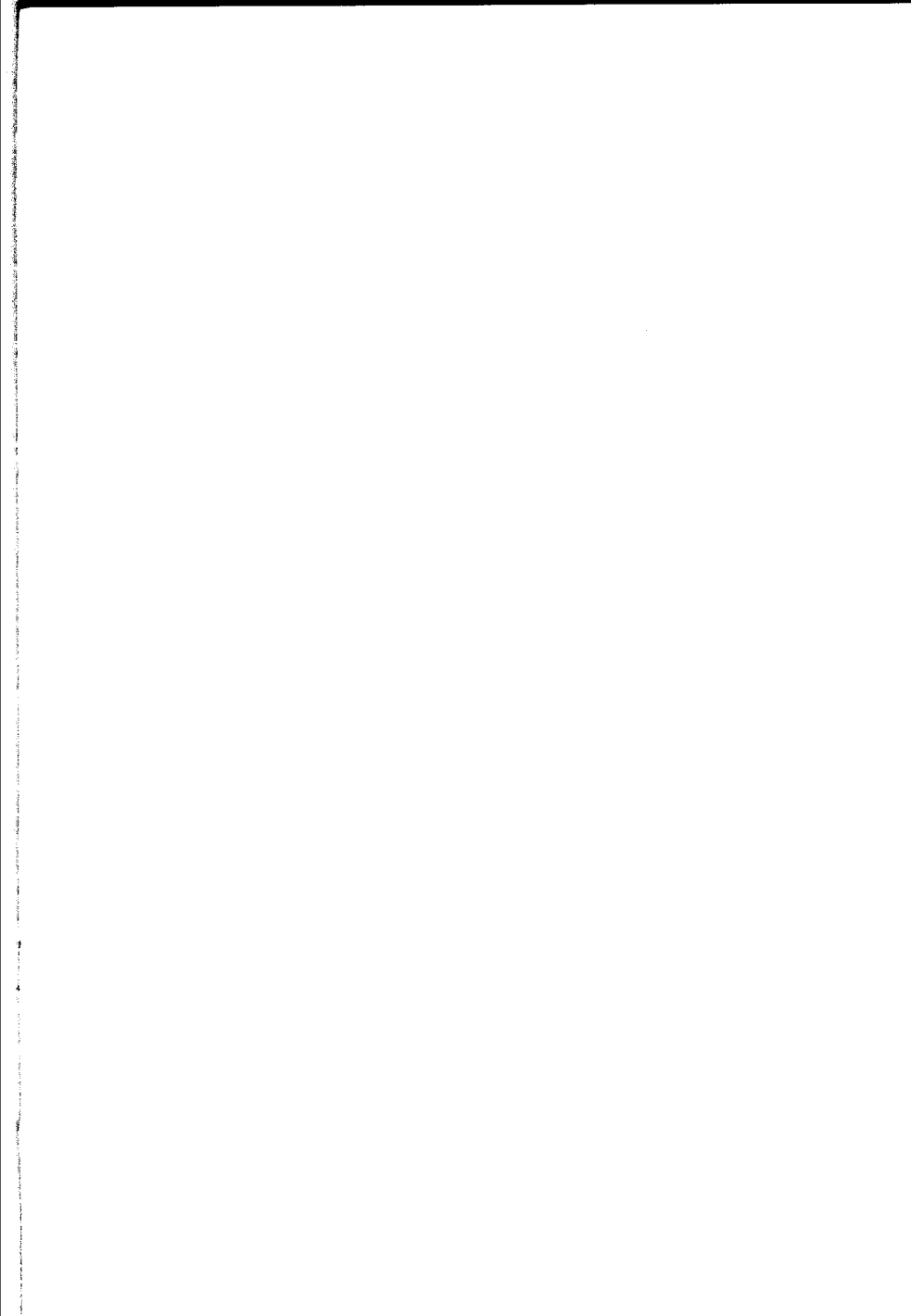
今回の教育改革にはどこか、うさん臭いものがつきまとっている。突き詰めていくと、そのような時代に回帰するしかない、あたかも詰め将棋のような。

同じようなことが、たくさんの分野で言える。雇用・労働、高齢者介護、児童福祉、ハイテク技術、経済政策……。国際的な大競争時代を生き抜くべく生産性を高めるためには、戦後民主主義の根本原理だった「結果の平等」をこれ以上求めるべきではない、競争原理を徹底させて、勝者が報われる仕組みを作るべきだと、経済学者たちは声高に主張する。

だが、どこか変だ。同期入社のサラリーマンの給料が定年まであまり差がつかないとか、日教組の先生は運動会の徒競走で手をつないでゴールインさせるなどといった話題がしばしば持ち出されるが、そんなことが社会全体を説明する要素になるのだろうか。第一、無理に探さなくても、日本には大金持ちも貧乏人も、両方ともいくらでもいる。

「結果の平等」などという初めから存在しないものを、やめようと主張する目的は何だろう。戦後の民主主義が守ろうとしていたものがあつたとすれば、それは「機会の平等」であつた。とすれば、彼らが本当に攻撃したいのは、むしろ「機会の平等」の方ではないのか。

そんなことを考えながら、取材を進めてみた。いろいろなことがわかって、恐ろしくなってきた。



第一章 「ゆとり教育」と「階層化社会」

「非才、無才には、せめて実直な精神だけ養ってもらえばよい」。基礎学力を培う義務教育の年間授業時間数をあえて削減する「ゆとり教育」について、三浦朱門・前教課審会長はこう説明した。九〇年代の日本型経営の崩壊とともににわかに加速した「複線型教育」への回帰――。

教育改革国民会議座長の「優生学」

「人間の遺伝情報が解析され、持って生まれた能力がわかる時代になってきました。これからの教育では、そのことを認めるかどうかが大切になってくる。僕はアクセプト（許容）せざるを得ないと思う。自分でどうにもならないものは、そこに神の存在を考えるしかない。その上で、人間のできることをやっていく必要があるんです。

ある種の能力の備わっていない者が、いくらやってもねえ。いずれは就学時に遺伝子検査を行い、それぞれの子供の遺伝情報に見合った教育をしていく形になっていきますよ」

江崎玲於奈・教育改革国民会議座長（七十五歳）が力説している。二〇〇〇年六月下旬、彼之城である芝浦工業大学学長室。首相の私的諮問機関のリーダーとして戦後教育の抜本的改革を進めるノーベル物理学賞受賞者は、そして「優生学」を口にした。

「遺伝的な資質と、生まれた後の環境や教育とでは、人間にとってどちらが重要か。優生学者はネイチャー（天性）だと言い、社会学者はノーチャー（育成）を重視したがる。共産主義者も後者で、だから戦後の学校は平等というコンセプトを追い求めてきたわけだけど、僕は遺伝だと

思っています。

これだけ科学技術にお金を投じてきたにもかかわらず、ノーベル賞を含めてたった五人しかいない。過去のやり方がおかしかった証拠ですよ」

遺伝がすべてだとまでは、江崎座長は言わない。彼は初めのうち、「天性に見合った教育が必要だ」とだけ話していた。具体的な方法論を質して返ってきたのが、このような主張だった。ちなみに科学技術系で彼以外に日本人でノーベル賞を受賞したのは湯川秀樹（物理学）に朝永振一郎（同）、福井謙一（化学）、利根川進（医学・生理学）と、これに二〇〇〇年十月に受賞した白川英樹（化学）が加わる。

文部省によれば、現在の教育改革は次の四つの視点で構成されているという。

「心の教育の充実」「個性を伸ばし多様な選択ができる学校制度の実現」

「現場の自主性を尊重した学校づくりの促進」「大学改革と研究振興の推進」

かくて公立小中学校の通学区域弾力化や中高一貫教育の推進、大学入学の際の飛び級制度などのプランが次々に実行に移されてきている。

特に「個性」に関わる部分では、「行き過ぎた平等主義や画一性を是正すべし」とする考え方が主流になった。教育改革国民会議でも、二〇〇〇年七月に発表された三つの分科会報告のうち「人間性」をテーマとする第一分科会が、こう説いていた。

「戦後教育は、人間が希求するものと、現実の姿とを混同した。私たちは自由を求めるが、しかし人間が完全な自由を得るということは至難の技である。私たちは平等を願うが、人間は生まれた瞬間から、平等ではない。運命においても才能においても生まれた土地においても、私たちは

決して平等たり得ない。〕

現実認識としてだけなら妥当かもしれない。ただ、江崎座長が率いる教育改革国民会議の「自由」「平等」論は、一般の理解をかなり超えた意味を帯びていく。

遺伝子診断に基づく教育への期待を私に述べた後で、江崎座長はこう続けた。

「個人一人一人の違いを認める教育とは、つまり、そういうことだ」

江崎座長の発想の根幹には、優生学ないし優生主義と呼ばれる思想がある。とりあえず基礎的な文献の序文を紹介しておきたい。

『優生学』という言葉は一八八三年にチャールズ・ダーウインのいところであるイギリスの科学者、フランシス・ゴルトンによってつくられた。遺伝を数学的に取り扱う学問分野と初めて取り組んだゴルトンは、「生まれながらに優れている」あるいは「遺伝における優秀性」を意味するギリシャ語から優生学なる新語を造語した。彼がその言葉で意味したのは、「生存により値する人種または血統に対し、劣った人種あるいは血統よりも、より速やかに繁殖する機会を与えることによって」、人類を改善する「科学」を創りだすことだった。〕

へしかし、ゴルトンの時代から今日に至るまで「優生学」は彼の目指した意味とは異なっており、別の醜悪な意味を持つ言葉となり、事実また醜悪な行為にあふれた学問でしかなかった。二〇世紀の前半には、優生学は新たに勃興した遺伝学の誤った理解と手をたずさえて人間に対して残酷かつ抑圧的な学問となり、ナチスの時代にあつては暴虐極まりない蛮行を引き起こしたのである。しかしながら最近では、人種によって知能が異なると主張する人々の中で、また、社会生物学を信奉する一部の人々の中で、あるいは人間に遺伝子工学を施そうとする一部の人々の中で、ゴ